

# 放送人の会

No.67

2014.10.17

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館3階 Tel.&amp;fax03-3221-0019 Mail info@hosojin.com

発行 一般社団法人・放送人の会 会長 今野 勉 編集担当 伊藤雅浩 (広報委員長・編集長)、鈴木典之、逸見京子、前川英樹 (HP担当)、松尾羊一 事務局 佐藤真美子、須齋恵美子

## 日韓中テレビ制作者フォーラム

### 横浜大会を終えて

放送人の会・会長 今野 勉

#### 1、フォーラムの歴史から学ぶこと

2001年のサッカー・ワールドカップが日本と韓国の共催と決まって日韓の友好ムードが高まった時期に、日本の小泉首相の靖国神社や教科書問題などで逆に日韓の外交関係が険悪化するという時代状況の中で、韓国のドキュメンタリスト鄭秀雄(ジョン・スウン)が顔見知りの熊本放送の村上雅通らに「我々日韓のテレビ制作者の交流会をやろう。我々の手でワールドカップのテープカットをやろう」とよびかけた。

こうして始まった第1回「東アジアテレビ制作者フォーラム」は、しかし大失敗に終わった。理由はテーマの設定のまずさにあった。「歴史認識」をテーマにしたのは両者がお互いに自らの立場はどうせん相手に理解されるはずという楽観を持っていたからである。結果は交流・友好どころではなく喧嘩別れに近い形で終わった。

その反省に立って、互いの番組を上映しあい、番組を議論しあう中でお互いの理解を深め合うという形になったのは第2回からである。

第3回にオブザーバーとして参加し、4回目から正式に参加することを表明した中国は二つの条件をつけてきた。ひとつは「中国は『中国電視(テレビ)芸術家連盟』として参加しフォーラムを主催する。日本

も韓国も主催団体を決めてほしい」というものだった。

日韓で始まったフォーラムは、制作者個人の参加で運営されていた。「個人の自由な参加と自由な発言で運営される」のが原則だった。

中国のテレビ制作者は全国国営放送の所属であつて個人の自由な参加はありえないからこの条件は中国にとって必須だった。

日韓はこの条件を受入れた。韓国は「韓国放送人の会」と「PD連合(プロデューサー・ディレクター連合)」が主催団体となり日本は「日本・放送人の会」が引き受けることになった。

「個人の自由な参加と自由な発言」を是とする会員はその時脱会した。

中国のもうひとつの条件は「テーマとしては、政治、社会、歴史を除外する」というものであった。中国の真意は、フォーラムを歴史をめぐる政治的議論の場にしたくない。番組の共同制作や販売など実利の場にした、というものであった。

こうして第4回から今日の「日韓中テレビ制作者フォーラム」が始まったのである。第4回目に主催国中国が掲げたテーマは「民族文化の伝承と制作者の使命」であった。ところが、各分科会に示されたテーマは「ドラマ家族」、「ドキュメンタリーII

環境」、「バラエティII青少年」であった。メインテーマと各分科会のテーマは無関係であった。メインテーマは「公的」なもの、各分科会のテーマは各国のテレビ制作者が実質的に討論できるもの、という使い分けがなされていた。それが中国の制作者たちが考えた「実利」であつたのだろう。

#### 2、横浜で起ったこと

「日本のドラマの中のせりふ、戦争が起きた」という表現はあまりに他人事すぎる。日中戦争を起したのは日本だ。加害者意識が低すぎる」という韓国の参加者の発言に中国も同調して、一時フォーラムの進行がとまった。韓国の「PD連合」はいつも純粹でストレートである。問題が「公的」になれば中国側もそれに同調せざるをえなくなる。

私はその時第4回の中国の実利的運営のことを考えていた。中国の真意はフォーラムを友好的ビジネスの場として続けていくことにあるはずだと。その推理は結果的に正しかったのだが、私を含めて日本側の参加者に衝撃だったのは韓・中が口を揃えて「9・18を明日に控えて」と言った時だった。「9・18」が昭和6年の「満州事変(柳条湖事件)」の日であり、「日中戦争・太平洋戦争に連なる15年戦争の始まりの日だ」ということを、私たち日本のほとんどの参加者は意識していなかったのだ。実は、それが「横浜大会で起ったこと」なのだということをお私は一生涯忘れないだろう。

# 第14回日韓中テレビ制作者フォーラム in 横浜

テーマ・出会う都市・文化、そして人間

日時・2014年9月15日(月・祝日)

18日(木)

会場・横浜シンポジア(横浜産業貿易セン

ター・9階)

## 《15日》

開会式・歓迎パーティー

—会議場ロビー

開会挨拶・今野勉

各国挨拶・朴 健植(韓国)

范 宗叙(中国)

来賓挨拶・中山こずえ横浜文化観光局長

金 文煥 韓国放送文化振興

会理事長

乾 杯・大山勝美

## 《16日》

作品上映と討論

「星から来たあなた」(韓国)

制作者・張 大維

「茶・一葉の物語」(中国)

制作者・王 冲霄

「熱中コマ大戦」(東海テレビ)

制作者・阿武野勝彦、鈴木辰明

「儀軌8日間の祝祭」(韓国)

制作者・崔 必坤

「生活永遠沸騰」(中国)

制作者・金 屹非

自由交流・会場、ロビー

夕食会・大珍楼(中華街)

## 《17日》

作品上映と討論

「最終章を奏でる家」(宮崎放送)

制作者・中本奈緒、平沼邦子

「漢字の英雄」(中国)

制作者・秦 峰

「無限に挑戦」(韓国)

制作者・金 泰浩

「基町アパート」NHK広島

制作者・大橋 守

ナイトツアー・横浜市内

韓・中の参加者を中心にバス2台で

フェアウエルパーティー

—TVK 1階アプローズ

挨拶・黒岩祐治神奈川県知事

演奏・東京クローバークラブ(同志社大学

OB男声合唱団)

## 《18日》

各国テレビ事情報告

中国「Bチャットなど新しい端末、ツール

とコンテンツの運命」張 雅欣

韓国「MBC・KBS・SBSの寡占状況

からの変化、中国でのヒットなどコンテン

ツの状況」金 求山

日本「ATPなど日本のプロダクションの

状況」今野 勉

総括・韓国 朴健植、中国 范宗叙、日本

河野尚行

閉会式 トロフィー授与

次回開催予定発表

閉会宣言

## 大会組織

組織委員長 今野 勉

名誉顧問 大山勝美

顧問 河野尚行

組織委員 山田尚、渡辺紘史、長沼士朗、

前川英樹、関佳史

実行委員 渡辺紘史、山田尚、長沼士朗

隈部紀生、前川英樹、山路家子、逸見京子、

田中則広、牧之瀬恵子、関佳史、鈴木典之、

伊藤雅浩、村上雅通、曾根英一、

《事務局》佐藤真美子、須倉恵美子

実行委員の林健嗣氏は病気で大会を欠席

## 東アジア文化都市番組上映会

日時 9月18日 13時〜17時

場所 横浜シンポジア

主催 放送人の会、2014東アジア文化

都市実行委員会

上映番組

「東アジアの文化都市 泉州」(中国)

制作者 陳 家平

「韓国紀行 光州編」(韓国)

制作者 徐 章錫

特報首都圏 「多国籍 いちよう団地のい

ま」(NHK横浜)

制作者 江口 基

横浜ミストリー「吹奏楽はじめて物語」(Y

OUテレビ)

制作者 高科英昭

## 訃報

当会特別顧問 大山勝美様が、10月5日 多臓器不全のため逝去されました。ご冥福をお祈り致します。尚、葬儀は近親者のみで済まされました。ご香典・ご供花は堅くご遠慮されたいとのことです。お別れ会につきましましては、改めてお知らせいたします。

平成26年10月8日

一般社団法人 放送人の会

## 背負っていたもの

阿武野勝彦

帰りの新幹線。目を閉じ、つぶやいてみた。「日中韓……」茫漠たる砂漠が現れ、砂塵の向こうから怒号が近づいてくる……。国家、民族、戦争、歴史、敵意、反目、共感表現、覚悟……。様々な言葉が浮かび、そして消えていく。私は、あの場に、国や民族を背負って参加していたのだろうか。私が背にしていたものは、「熱中コマ大戦」という番組ではない。

例えば、政治権力を監視する視線を私は持ち続ける。それは私の使命だと思っている。しかし、あの場にいた制作者のすべてがそうだったわけではない。制作者という認識もそれぞれだったのではないか。それが、みんなが我が内なるナシヨナリズムをムズムズさせたのは何故なのだろう。国家と制作者。社会とテレビ。テレビと制作者。番組と私……。

険に浮かぶ砂漠。怒号が鎮まってく中で、「関係性」というカギを拾い出してみたいと思った。

「日中韓……」みんなで撮ることができなかった集合写真。その不在が、テレビ制作者とは何者か、を考える機会だったのではないかと思いついてる。

「熱中コマ大戦」の上映に御尽力くださった皆様様、フォーラムを盛り上げていただいた皆様様に深く感謝します。ありがとうございました。

うごきました。

\*\*\*\*\*

## 瑣事拾遺

伊藤雅浩

▼フォーラム会場の9階ロビーの広い窓からは横浜の港が一望できた。眼下の大橋に停泊していたのは15日飛鳥II5万トン、17日パシフィックビーナス2万6千トン、18日ダイヤモンド・プリンセス11万6千トンである。飛鳥IIは長崎の三菱造船が社運を賭けて1990年に建造したクリスタルハーモニーが改装され名前を変えた船で、長崎生まれの私には久しぶりに恋人に会う気がした▼この窓の下はイチョウ並木で黄色く熟れた銀杏の実がびっしりなっているの見える。このことを韓国の通訳に教えると「私、銀杏大好きです。韓国では銀杏をよく食べます。あれ、採りたいですね」と答えた▼16日に上映された中国の「茶、一葉の物語」では中国はさすがに広いと思わせ、いろんなお茶のいろんな作り方、飲み方が面白く、崑崙の雪菊茶が珍しかった。ネットで調べると年間の生産量は500kgと品薄で、かつては500g13万円したそうだが、今では楽天のネット販売で100g約1万円、横浜中華街の「悠香房」（中国茶房）では1杯700円で飲める。こんな情報を会場で伝え、会場からは拍手を頂いたが、中国の番組制作者は、円の金額がピンとこなかったのか、興味を示してくれなかった▼16日

夜の夕食会には中華街の大珍楼。それぞれの円卓に日中の参加者が着いて通訳がいて国際交流をしたが、私の隣には若い中国の女性が座った。仕事を聞くといまはプロダクションの経営スタッフだが、かつては女優だという。常盤貴子に似ているが背が高くきつい表情だ。「可愛いお嬢様ではなく、強い男勝りの役が似合いそうだ」と言う。「そんな日本人の女性を演じたことがある」という。この日の朝刊が李香蘭の死去を報じていたこともあって私はピンときた。筆談用のスケッチブックに李香蘭と書く。「ありしヤンラン」とすぐわかったので、続けて川島芳子と書く。「この人を私は演じた」という。すぐそばに中国ロケでドラマ「李香蘭」を作った堀川とんこ氏がいたので紹介して話がはじまろうとしたとき会場の司会者が彼女を皆さんに紹介したいという。しかし当人は「絶対いやだ」と席を立とうとしない。紹介されるのを固辞する理由はいろいろ想像できたので司会者はすぐあきらめた。国際交流は簡単ではない▼フォーラムの終わり近く、各国の代表が総括を発表したが、韓国の朴健植氏が引用した古人の言葉がよく聞き取れなかった。後で確かめると「和而不同」、論語の子路第十三にある「子曰。君子和而不同。小人同而不和」の一節である。通訳には「君子は人に接するのに乖（そむ）き戻ることなく互いに和らぎ親しむけれど、常に道理にかなうか否かを考えるから妄りに媚び親しんで合同することをしな

い。小人は反対に媚び親しんで合同するけど、私利を求め権勢を争って互いに排斥するから乖（そむ）き戻ることなく和らぎ親しむことができない」とある。「歴史認識は違っても君子の交わりをしよう」とのメッセージと私は理解した▼フォーラムの後、東アジア文化都市番組上映会の光州を紹介する番組に出てきたガンギエイを発酵させた珍味に驚いた。ガンギエイは日本全国どこでもとれるが鮮度が落ちるとたちまちアンモニア臭がする。光州の珍味はガンギエイを生のまま壺に入れ、牛小屋や堆肥の上で発酵させるのだが、数日でべつとりと粘りが出、強烈なアンモニア臭があり、口に入れると強い刺激で、すぐマツカリで流し込まないと口の粘膜が爛れるという。ネットではホンタクと紹介され、人糞に漬けて発酵させるとあり、差別と蔑視に満ちた書き込みがある。日本では食べられないが、勇気を出して食べてみれば差別や蔑視はなくなると思はる。光州では結婚式に欠かせない料理だそうだ。

\*\*\*\*\*  
有難う 同時通訳の皆さん！

荻野慶人

東京・神宮外苑の日本青年館で開催された第5回（2005年）より、僕はアマチュア・ムービーカメラマンとして動き回っていたので、ヘッドホンで同時通訳を聴くことは難しかった。

撮影係を放棄された今回からの着席しでの作品観賞は、字幕であっても起承転結

が明快な上に、制作者・演出者の説明や場内からの質問・提言が耳に鮮やかで、同時通訳者諸姉の研鑽と力量に驚嘆するばかりだ。

日本のドキュメンタリードラマ『基町アパート』(NHK広島)は、中国残留孤児の老人が住む高層アパートの一夏の群像を描いて、我々日本人には中味濃い佳作だが、中韓両国には我慢ならないものであった。発言(男性)は批判というより叱責に近い。通訳が女性だったため救われたが、男の罵声だったら耳を塞いでいただろう。

「世界共通の歴史認識を軽んじている。被害者意識のみで加害者意識が全くないのに対し抗議する。原爆や満州の扱いに日本人は無神経だ。原爆の前にはパールハーバーがあり、満州へのソ連侵攻の前には日本軍の侵略がある」と中国勢が語気を強めれば、韓国勢も「歴史認識が甘い! 自国だけではなく国際標準に立つことが、メディアに従事する我々の責務だ!」と、早口の猛攻に遅れない同時通訳はお見事で、責められているのに拍手を送りたくなる。

僕は願う。歴史認識は十人十色で遠慮は要らない。極東国際軍事裁判は区切りとして認めた上で、ABC包囲網に窮鼠と化した過去、欧米列強からアジア諸国に解放独立を促した過去…

そして現在、拉致問題や北方領土問題に苦しむ非力の日本に、美声通訳の援けを借りて妙案を探れないものか…。

\*\*\*\*\*

## 総括

### 河野 尚行

私たちは普段、日本の視聴者に向かって番組を放送し、視聴者からの反響を一種の鏡として自分の制作した番組を検証してきた。

日韓中制作者フォーラムの会場は、その鏡は一枚でなく、実は、三面鏡であったのである。普段自分が見詰める正面の顔だけでなく、普段意識しない左右からの姿が映る。更に、角度によつては自分の思いもしない後姿も映し出す。そう改めて思い知らされたのだ。

「あなた方は被害者意識には敏感だが、加害者であったことを忘れているのではないか」という指摘は、正直胸に刺さった。では、あなた方はどうなんだ。という反論も口に出かかったが、こし再放送された大島渚の「忘れられた皇軍」のラストコメントがちらついた。

ドラマ「基町アパート」の放映直後の中国の反応はともかく、総括の場で、中国、韓国から、思い切った本音のメッセージが伝えられた事は、オブラートで包んだ社交辞令の会議よりはるかに良い。これも日韓中テレビフォーラムの一つの成果といえるのではないか。

中国、韓国からの参加者の中には69年前に終わった戦争の体験者は一人もいない。彼らが受けてきた教育による反応だ。私たちが昭和史を描く場合、満州事変、満

蒙開拓の実態、日中戦争、それに続く太平洋戦争と、相手の視点も取り込んで多面的に客観的に検証してきたつもりである。だが、関東軍の暴走や統帥権を振り翳す軍事政権の責任は鋭く問うても、それに巻き込まれた日本国民は被害者であるという視点がかかなり色濃い。そこを彼らは許さない。

ドラマが訴えたかった趣旨とは遠く離れてかなり高揚した意見が展開された。中国東北部の一連の出来事での加害者意識がない。広島原爆も日本が真珠湾攻撃を最初に仕掛けたその報いであるという認識がない。と言う具合だ。観念だけが抽出されて議論が仲間内で白熱していく(韓国の場合、翌日朝5時まで続いたという)。

大会の設計者、議事進行の責任者にとつて大いに悩ましい事態であったが、結果論的に言えば、この問題を一日かけて議論しても良かったと思う。中国、韓国の意見陳述の形で、大会は一応の終止符を打ったが、それでも言論の自由、表現の自由を持つ国でのフォーラムのありがたさが身に染みだ。本気で熱い議論を交わしたうえで意見表明は素晴らしいことである。

ただ、議論の基礎になる事実には忠実であつてほしい。原爆による広島犠牲者の数がわずかに3万人だったり、海外のコンクールへの日本からのドキュメンタリー出品作は原爆ものばかりだという発言は全く事実と反する。イタリヤ賞、エミー賞、パンフレビ祭、モンテカルロ映像祭等の、この50年の入選リストを見ただけでもそ

の発言の誤りには気付くはずだ。200を超える原爆を扱った番組の中には、確かにアメリカの非を責めるものもあるが、ボタン一つを押すだけで、何万、何十万という人間の死と環境の破壊をもたらし、放出された放射能によつて、長期間、次世代までも生命が脅かされる実態を人類に広く訴える作品も多いのだ。

自称、ドキュメンタリストと言うからには、ファクトはしっかり押さえてもらわなければならない。

いま、日韓中3国は政治状況が流動化している。負の連鎖が続いている。こういう状況の中で、日韓中の放送人は、外に敵を作つて内部の結束を図る。異国籍の人々を非難して溜飲を下げる。そんなさもしい勢力には断じて屈服してはならない。

\*\*\*\*\*

## ブルーライト横浜に肖つて

### 工藤英博

今回の開催地横浜市が、開港150周年を記念して行った「ご当地ソングアンケート」で、2位の童謡「赤い靴」に大差をつけて第1位になった「ブルーライト・横浜」。いみじくも、この歌はネットによれば、日本の音楽が禁止されていた軍政権下のソウル、釜山をはじめ韓国内で知られたほぼ唯一の歌謡曲であり、「韓国人が最もよく知る日本の歌」と紹介されている。カラオケが輸入されてからもクラブなどでは、この歌ばかりが歌われていたという。

また朴正熙大統領も日本から本楽曲のカーテイスを持って帰って宴会で歌ったそうだし、その後の韓国K-POP音楽に影響を与えたと証言している。

それはさておき、今回最も会場を沸かせたのは「熱中コマ大戦」(東海テレビ)。全国から集う町工場の職人たちが、喧嘩ゴマに加工精度と心意気をかけて競い合う。航空機の部品を作る町工場「シオン」チームが次々と強敵を破り、遂には全国大会で日本一になる。全編に創り手の気迫が漲り、中小企業のものづくり職人への応援歌になつていった。予想外だったのは「基町アパルト」(NHK広島)で、表現の一部を巡って韓・中側から厳しい批判が相次ぎ、会場が混乱した。過去の歴史認識の隔たりの大きさをあらためて痛感し、少なからず衝撃を受けた。韓・中の人たちにとっては「事変」や「事件」という認識はなく、それらは紛れもなく「戦争」なのだ。ただの一度も侵略や植民地化されたことのない日本。私たちはそのことに鈍感になつてしまつているのだろうか。歴史と文化の長い縦糸に、政治経済の横糸がからみ合う。しかし、今回3ヶ国の制作者が深い共感や厳しい批判を述べ合えたことが糧になつて、未来志向で相互理解に努め、次回成熟した韓国大会になるよう期待したい。

## 14回の重みと今後へのステップ

### 歴史紀生

2001年に開かれた第1回の日韓フ

エリー船上での大会のテーマは、「TV制作者たちの歴史認識の問題」だった。激しい議論が交わされたと伝えられている。しかしそれ以後の大会テーマは、文化、家族、都市、人間など直接には歴史認識の問題ではないテーマだった。

一方世界はグローバル化が進み、その中で東アジア意識が問われている。また各国で高齢化社会の問題が深刻になり、インターネットの普及でメディアが多様化し、その中で放送の在り方が問われている。各国ともコンテンツの重要性についての考え方は共通だが、具体的な番組制作、情報提供の方法については試行錯誤が続いている。

そのような状況の中で今後のフォーラムはどうあるべきか。歴史認識問題は、ヨーロッパの共通歴史教科書のようにたいへん難しい問題ではあるが、長期的には放送関係者も避けるのではなく、長時間かけて十分議論できる機会をつくるべきである。また3国共通の高齢化社会問題などは直ちに共同制作ができないにしても、テーマを早く決めて競作して議論を交わすことができないだろうか。そんなことを思つた第14回の横浜大会だった。

リメンバー(忘れないで)満州事変

—韓・中放送人が問うた歴史認識—

### 寒河江正

「あなた方日本人は明日9月18日が満州事変のきっかけになつた『柳条湖事件』の

日だと知らないのですか!」2014年9月17日の午後4時30分過ぎ、日本の3本目の作品が上映されたあと、番組内容をめぐって韓中のテレビ制作者から鋭い意見が述べられた。「異議あり」の作品はNHK広島が制作したドキュメントドラマ「基町(もとまち)アパルト」。ご覧になつていない方のために作品を要約すると……

「祖父と少年(小学校5年生)が主役。祖父は戦後満州で生まれるが残留孤児として中国人に育てられる。その後日本人残留孤児として祖国日本の広島に。基町アパルトが住居だ。一方少年は東京にいて戦争のことも、広島のこととも知らないまま夏休みに広島島の祖父を訪ねる。日本語がしゃべれない祖父。いらだつ少年。しかし住んでいるうちに少年は仲間や先生と呼ばれる人と知り合う。コミュニケーションが交わされる。祖父の周りも少年との関係を知って気配りをはじめ。短い夏の終わりに、少年と祖父の間に笑顔と少しの会話が……」

問いのあつた韓中制作者は番組内で現代の歴史認識につながる戦争のはじまりが語られていない。これに対し日本の放送人から当然説明や反論があつたと思う。しかし私は、今回の韓中放送人の発言の中に真摯な気持ちが出ていたと思つた。

### 「九・一八を忘れるなかれ」

### 鈴木嘉二

6年前に中国の瀋陽市を訪れた際、

「九・一八歴史記念館」を見学した。満州事変の発端となつた1931(昭和6)年の柳条湖事件の現場付近に建てられ、「勿忘(忘れるなかれ)九・一八」という江沢民の筆による巨大な記念碑があつた。泥沼の日中戦争はここから始まり、中国では日本の侵略を招いた「国辱の日」とされている。

第14回日韓中テレビ制作者フォーラム3日目の9月17日、最後に上映されたNHK広島放送局の「基町アパルト」は、満州で生まれた中国残留孤児の祖父と、東京育ちの孫とのふれあいを通して、多民族の共生や平和の大切さを訴える。このドキュメンタリードラマが時代背景として取り上げた旧満州などの表現を巡って、中国・韓国側から激しい批判を浴びた。特に、中国側は「よりよつて九・一八の前日に上映するとは」と、直後の記念撮影をボイコットするほど猛反発した。

日韓中の間に横たわる「歴史認識問題」とテレビ表現のあり方をどう考えたいのか。このフォーラムの今後を考えるうえで避けて通れないテーマだが、短文では意を尽くせない。ただし、日本の参加者の多くが中国人にとつての「九・一八」の重さを失念していたことについては、率直に認めなければいけないだろう。

日本がハワイの真珠湾を攻撃し、太平洋戦争が始まつた「二・一八」(41年12月8日)は、ドラマやドキュメンタリーなどで語り継がれているのに対し、私を含め日本

人はなぜ「九・一八」に無頓着なのか。戦後70年を来年に控え、改めて自問したい。  
\*\*\*\*\*

### 鈴木典之

『基町アパート』は、戦争の悲劇を省み、平和と共存を「複眼」を備える子供世代の未来に託した、普遍的な祈りの作品で、冒険ではあるがフォーラムの場でこそ率直に話し合うにふさわしいテキストだと、小生も考えていました。仮に中・韓との間で激論の応酬になっても、それは越えるべき「山」、だから、議論が不消化に終わることが悔やまれます。

小生はドラマの中のおじいちゃんと同じ世代。戦中戦後を通して体験し、自国の歴史の過ちにも真摯に目を向けて来たこと自認する一人としての判断であり願いでした。判断が偏向的で甘い中・韓の若い参加者たちが一方的になる「姿勢」に、違和感と危惧を持ちます。理解はしても、見方を譲る気は起こりません。

今回、中・韓の反撥をなだめて、フォーラムの継続に導いた大山、今野、渡辺氏らの舞台ウラの尽力には頭が下がります。その一方で、継続の意味はあるのだろうか、と深刻に悩んでもいます。

松尾羊一氏が、日本の窓口役の「放送人の会」は、フォーラムの「勝手口」だと表現しましたが、至言だと思いました。中・韓は「玄関口」。身分や立場に縛られるの

に較べて、日本が自由で風通しのいい「勝手口」だから、中・韓も重宝してフォーラムが成り立っている。小生はそう我田引水し、この10年間、政治を超える未来志向の「文化構築」の「場」、フォーラムに開わってきました。

フォーラムも、所詮は中・韓ベースの無難な範囲内での交流しか期待できないのか。札幌、慶州、無錫と徐々に積み重ねて来た筈の「自由に口を開く」傾向が影をひそめた畏縮ぶり、それが小生には残念でなりません。

フォーラムが未来志向の歴史構築に力を合わせられるのは、結局は政治解決まで待つしかないのなら、フォーラムの今後の在りようをどこに求めたいのか。性急だとは思いつつ小生はそこに挫折感を持ち、気分が沈み込んでならないのです。

\*\*\*\*\*  
ハーフでなく、ダブル

### 長沼士朗

第14回の日韓中テレビ制作者フォーラムは、福岡、東京、札幌に次いで今年はず都圏の横浜市で開かれた。

例年の如く、韓国の「星から来たあなた」、中国の「茶、一葉の物語」、「漢字の英雄」など、日本の参加者にとっても興味深い作品が上映されたが、ここでは日本からの参加作品、「熱中コマ大戦」と、ドラマ「基町アパート」の内容に触れながら、今回の

フォーラムの感想としたい。

まず「熱中コマ大戦」については、一見、手回しコマの回る時間を競い合う単純な対戦のくり返しのように思われたが、その背景には、航空機の部品などを作る中小企業のものづくりの技術が活かされているという解説なども加わり、何度も会場が沸いたように、相手のコマを弾き飛ばしたり、相手より長く回るコマの動きに、一戦一戦思わず引き込まれてしまった。

利益を第一とする産業社会のものづくりの世界にも、その背景には心をワクワクさせるような人間の遊び心が働いていることを教えてくれた、まさに楽しくて爽やかなエンターテインメント番組であった。

もう一本は、参加作品の最後に上映されたNHK広島局制作のドラマ、「基町アパート」である。この作品では、毎年同局が夏に取上げる原爆投下の問題と共に、今年も太平洋戦争で中国に置き去りにされた日本の残留孤児の問題が組み込まれていた。

しかしこの作品については、上映直後、韓国と中国の参加者から、この戦争で日本が両国を侵略した加害者責任の問題をひきとも触れられていないことに、強い批判の声が出された。

こうした発言は、戦後69年の日本の歴史を経ても、加害国の歴史的責任の問題は容易に消し去ることができないことを我々に痛感させてくれたが、同時に、もう一つ何か割り切れない気持を私の心の中に残

した。

このためフォーラムが終わり、自宅でも一度DVDの作品を見てみると、フォーラムの時には聞き流してしまったが、作品が始まって25分ごろ、小学校の校長先生の「中国女性と残留孤児の間に生れた子供は、ハーフではなく、ダブルなのだ」という発言に、強く引き付けられた。中国人と日本人の間に生れた子供は、父母両国の血を受継いだダブルの存在だという意味である。

「そこには、加害と被害の関係を乗り越えた、新しい人間関係が生れている」、この作品を作った制作者たちの心には、そんな思いがいちばん強くあったのではなからうか。

そんなことを思うとき、中国や韓国の参加者の指摘は今後もしっかり受けとめながら、こうした問題は、来年以降も避けることなく、三国で真剣に話し合っていくべきテーマだと思った。

\*\*\*\*\*  
問われる『基町アパート』の歴史表象  
史表象  
玄武岩

最終上映作品となったNHK広島放送局の『基町アパート』の歴史表象の問題をめぐって紛糾した。それについて日本側の対応は適切だったか。これでは韓国や中国側が示す歴史認識がフォーラムの前提となり、そこで日本の番組は、つねに韓国や中国が提示する歴史認識のフレームによ

って評価されることになる。

東アジアで共有できる番組作りとはいかなるものか、その議論をとおしてナショナル・ヒストリーにとらわれないより普遍的な番組を追求することは、フォーラムの本来の趣旨といえる。そのためには日中が前提とする「共通の歴史認識」は最小限にとどめ、それぞれの社会が抱える諸問題の言説編成の構造と仕組みにも思考をめぐらせ、そこで展開される言説の対立と確執の現状を国家間のイデオロギーではなく、権力と市民社会との関係のなかでとらえ、東アジアの市民・民衆が連帯するトランスナショナルな公共性という立場から表現のあり方を普遍化していくことが求められる。

こうした立場に立てば、『基町アパート』をとおして、一方では、帝国日本の植民地支配や軍事的侵略を受けた韓国や中国において日本の「被害者意識」を際立たせる客体でありながらも、他方では、たんなる戦争の被害者ではなく日本の軍国主義により動員され犠牲となったことについて国家に補償を求める抵抗の主体でもある中国帰国者と広島島の原爆被害者の多面性を理解することもできたはずだ。

中韓の問題提起が不当だというのではない。ただ、それに対して「共通の歴史認識」に立脚した作品にのみ議論の価値を与えるのではなく、中国帰国者・原爆被害者の多面性を理解する歴史的地点を示すことで「共有できる歴史認識」を育み、東ア

ジア公共性の価値とはいかなるものか問いかけることもできただろう。フォーラムの未来は『基町アパート』を排除するのではなく、それへの共感を回復することができるとかにかかっているだろう。

\*\*\*\*\*

9・18

藤久ミネ

第14回日韓中テレビフォーラムが、横浜で開催されたことに、感慨をもった。

160年前の1854年、ペリーらとの地で日米和親条約(神奈川条約)が結ばれ、日本は世界史の舞台上に登場する。が、40年目に日清戦争、50年目に日露戦争、そして77年目にいわゆる15年戦争へと突入する。

こんな年号を並べ立てたのは、上映会3日目の9月17日、日本作品は戦争の被害を強調するが、加害者責任が乏しいとの批判が、中国を中心に沸き起こったからだ。

明日は9月18日という声が聞こえた。その時、わが周辺の若い人たちから「9月18日って何？」の呟きがもれた。柳条湖事件と説明すれば、ああ、と納得するが、心にズキンと響いている感じはない。思えば現在69歳以下の人びとは、誰も45の日本国を体験しなかった。

帰宅後、渡辺一夫「敗戦日記」45年9月のページを繰った。18日の記述はないが、9月5日「十時、外国文学科の会、集まる程のことなし。(外国を知らぬから

負けたんだ」と諸教授申さる。(外国を知らぬからこんな馬鹿な戦争を始めたのだ)と訂正すべきものである。

横浜シンポジウムホールロビーからは、世界へと開かれている横浜港が一望できる。このテレビフォーラム、覗いても覗いても話し合い、議論をもっとつきつめて、ずっと継続すべきであろうと、痛いほど感じた。

\*\*\*\*\*

僕たちの被害者意識

堀川とんこう

旧・満州(中国東北地方)や朝鮮半島で、終戦時に日本人が辛酸を舐めた様子を僕たちはテレビや映画でしばしば描く。それはおさげばに「戦争の悲劇」を描くためだ。戦争がもたらす悲惨を憎み、二度と戦争を起してはならない、という主張がこもっている。その場合、日本の民衆は戦争の被害者として描かれ、悲劇を強調するために、悲惨のなかで起こる美しいエピソードなども描く。こういう時、僕たちは「では加害者は誰なのか」をいつも描いているわけではない。加害者を戦争という抽象化された記号のようなもので済ませている。

実は加害者の実像を僕たちは持っていない。持たないまま、漠然と国や軍を加害者、自分たちを被害者として想定している。多くの国民がそうだろう。戦争指導者の責任、国策を熱狂して支持した国民自身の責

任について知識はあるのだが、指導者の重い罪を清算させる勇気が持てない。

この曖昧さは、国際的には、特に中国、韓国では将来的にも理解されないだろう。中国、韓国の国民と日本の国民は共通の被害者、というような甘い認識がこのまま容認されることはないと思う。戦争を指導し、国民を過たせ、多くの命を犠牲にした者の罪をはつきりとさせなければならない。

両国の歴史教育について云々する前に、変わらなければならないのは自分たちだろう。そんなことをしきりにかんがえさせられた日韓中テレビ制作者フォーラムだった。

\*\*\*\*\*

感想

前川英樹

1、日本参加番組「最終章を奏でる家」ホームホスピスかあさんの家(宮崎放送)と「熱中コマ大戦」全国町工場奮闘記(東海テレビ)の二本は圧倒的に優れていた。韓国中国の参加者からも高い素養化を得ていた。ローカル民放の制作力というより、熱気が伝わってきた。

2、「基町アパート」(NHK広島は、制作意図以前の日中戦争の位置付けを巡る議論(いわゆる歴史認識問題)で厳しい意見が出され、運営も混乱した。この番組を出したとすれば、その時どういう議論が展開されるであろうかについて、より深い想定をしておくべきだったと

いえよう。

3、この問題について色々考えている

うちに、ふと二つの短歌を思い出した。

「マッチ擦るつかの間の海に霧深し身捨つるほどの祖国はありや」(寺山修司)

「朝焼けの空にゴッホの雲浮けり捨てなばすがしからん祖国そのほか」(佐々木幸綱)

テレビにおいて、この歌人たちのレベルで国というものを客体化し得るかどうか。「身捨つるほどの祖国」と「捨てなばすがしからん祖国」。いま、改めてテレビと、あるいはメディアと国家の関係をとらえ返す時であろう。

4、以上について、放送人ブログに少し詳しく書いた。ご参照ください(ホームページより)。

5、今回のフォーラム運営は「手作り」を心掛けた。関係者の努力で何とか乗り切ることができたが、三年後を考えると難問山積。組織力も財務対応も容易ではない。心配だ。

\*\*\*\*\*

韓国バスとブルー・ライト・ヨコハマ

### 牧之瀬恵子

「歴史の話はするな〜！」日本の番組が起こした歴史問題は3日目夕方の観光の間も韓国代表団を憤慨させていた。その日は観光案内準備に張り切っていた。名所を調べ、ガイド原稿を書いた。しかし私

の不幸は、運転手との打ち合わせで会場の緊張した雰囲気知らなかったことだ。そしてバスが発着した時の私の第一声は「横浜の歴史の話をします〜！」だった。

興奮で苛立ちつるバスの中。そんな時見えたのが「港の見える丘公園」だ。「これぞチャンス！」と思った。実はこの公園にエピソードがあった。韓国ではいしだあゆみの「ブルー・ライト・ヨコハマ」が広く知られ、日本の歌が禁止された軍事政権下も多くの人が口ずさんだ。そんな「ブルー・ライト・ヨコハマ」のモチーフがこの夜景だ。しかしこの説明もヤジにかき消された歌え〜の声だった。私は苦し紛れにアカペラで歌い、韓国人たちもなごんで一緒に歌った。

切っても切れない日韓の関係。だから歴史認識論が起きる。しかし、摩擦の中でも彼らの心に届いたのは「歌」だった。音楽やアート、ひいては文化を伝えるテレビはこうして人々の心をつなぐ。しかし一方、伝え方を間違えると摩擦を大きくするのだと、今再び実感し、複雑な思いをかみしめながら眺めた横浜のブルーライトだった。

\*\*\*\*\*

「熱中コマ大戦」に大興奮したわけ

### 松尾羊一

面白いものは面白い。理屈はない。後からついてくる理屈がさらに説得力を増し面白さを倍加する。いい年をした大の大人

が子供のようにはしゃぎ、熱くなっている。観ている会場の爆笑に翻訳字幕に頼る時間差がない。面白さに国境はないからだ。ユーモアでもウィットでもギャグでもない。笑いについてベルグソンは「笑いは、生命ある人間に機械的なこわばりが生じた結果である」とした。落語家桂枝雀も「緊張の緩和によつて起こる脱力感を共にするの笑いだ」と同じような理屈を述べていた。面白いものは面白い。世代意識や民族や国家を超えた笑いがあるからだ。

鑄物のベーゴマ、めんこ(丸めんと長方形の写真めん)にビー玉、鉄の輪をはめた木ゴマがあった。戦前の長屋である。莫産の床で競じられる勝負に夢中の顔、顔：下町育ちの作家も「一種賭場がかった雰囲気があつてベエは真剣であつた(中略)子供達ばかりでなく、八百屋、魚屋、酒屋の十七、八の小僧まで加わることがあつた」と長々と描写した。永井龍男(石版東京図絵)だ。勝者は敗者のベーゴマをこつそり頂く。溜まつたベーゴマの多い、少ないが誇りと劣等感を少年たちに刻み込んだ。ところが朝、押入れに隠した膨大なベーゴマが「ない!」。忽然と消えていた。

台所の母親に聞いただと「あああれかい」と手を拭き拭き「供出したよ」とこともなげに。金属供出運動は異様なほど徹底していた時代だった。4、5日、母親とは口もきかなかつた。

わたくし、12歳の秋だった。\*\*\*\*\*

### 宇宙人からのメッセージ

#### 村上雅通

フォーラムの創設者である鄭秀雄さんは、自らのことを「宇宙からのスパイ」と称していた。それはまさしく「制作者が国家主義に陥つてはいけぬ」という鄭さんの持論を象徴する言葉でもあつた。そして、鄭さんは「我々制作者が『潤滑油』の存在になる」とも言った。ところが、今回の横浜での出来事は、鄭さんと同様の志でフォーラムに参加した私にとって、残念な結果になつてしまつた。

時代を切り取る制作者にとって、歴史に関する造詣や謙虚さは必要不可欠なものであることは当然で、問題となつた作品に、その一部が欠けていたという指摘も理解できる。しかし問題の決着が、一方的な非難に傾いてしまつたのは、今でも納得できない。それはあたかも、スポーツの大会で「旭日旗」を振つた云々のレベルと同様に思えたからだ。

我々制作者たちが、そのレベルに止まつていていいのだろうか。相手の状況を受け入れたうえで、どうすれば良い方向に持っていくかを皆が真剣に悩み、協議することがフォーラムの目指すものではないのだろうか。

戦後70年を控え、日中韓ではナシヨナリズムの機運が高まりを見せている印象がある。我々には、その動きをどう捉え、伝えるのか、試されている。

今、改めて鄭秀雄さんの言葉を噛みしめ

# 横浜大会 アルバム



会場ロビーからの見える横浜港。大栈橋に飛鳥IIが停泊中



産業貿易センタービル、9階が横浜シンポジア



金文煥氏（放送文化振興会）



中山こずえ氏（横浜市）



范宗叙氏（中国）



朴健植氏（韓国）



開会の辞・今野勉氏

歓迎パーティー



乾杯の発声・大山勝美氏



通訳のみなさん

2日目 (16日・火)

上映と討論

星から来たあなた (韓国)

茶 一葉の物語り (中国)



番組上映、討論会場



司会・肖東坡氏



王冲霄氏



張大維氏

熱中コマ大戦 (日本)

生活永遠沸騰 (中国)



金屹菲氏



崔必坤氏

儀軌8日間の祝祭 (韓国)



司会・曾根英二氏



鈴木辰明氏



阿武野勝彦氏

会場からの発言



夕食会・大珍楼



大珍楼の前で



3日目 (17日)

上映と討論

最終章を奏でる家

無限に挑戦

漢字の英雄



金泰浩氏



秦峰氏



司会・村上雅通氏



平沼邦子氏



中本奈緒氏

会場からの発言



挨拶・黒岩祐治知事

フェアウエルパーティー



東京クローバークラブ (同志社OB合唱団)



司会・鈴木典之氏



大橋守氏

基町アパート



横浜シンポジウム会場での記念写真・中国代表团はいない



日本・今野勉氏



韓国・金求山氏



中国・張雅欣氏

パワーポイントの画像を使つての報告



宋 日準氏

次回開催予定発表



日本・河野尚行氏



韓国・朴健植氏



中国・范宗叙氏

総括



トロフィー授与



YOUテレビ高科英昭氏



NHK横浜局江口基氏



韓国独立PD協会・徐章錫氏



泉州テレビ・陳家平氏

東アジア文化都市番組上映会



会場から一般市民の発言



横浜市文化観光局創造都市推進部

南野ショナー氏

松元公義氏

ている。

予期せぬ出来事

### 山路家子

フォーラムの会場は、産業貿易センタービル9階でした。広いロビーの窓は全面大きなガラス張りになっていて、そこからの眺望の素晴らしいこと言ったら！誰もが感嘆の声を上げました。180度見渡せる横浜の港の風景。左手に豪華客船、右手にはレインボーブリッジが、そして、さまざまな船がゆつくり青く光る水平線の彼方へ消えて行きます。

実行委員は初日、10時集合でした。昼

近く、喚く様な声が下方から聞こえてきて、皆で窓から覗き込みました。街宣車が2台

「横浜」と「東京」の文字が見えます。「日韓中テレビ制作者フォーラム反対!」とか言っているのです。ビルの周りを何時間回っていたのでしょうか？悲しい人達！無視しても良いけれど、フォーラム参加者の名札を外して食事にでたことでした。何事も起こらなくて良かった、でも考えさせられる出来事でした。

課題を残して次回に繋ぐ

### 渡辺弘史

昨年夏の開催地決定、各種助成金申請から始まった本事業は、大会終了後も、経理の検収、審査を経て、JKAからの立替え金の戻入、収支決算の確定する来年3月、年度

未まで終わらない。その意味で、以下は中間報告であり、総括というより、実施担当者の個人的な感懐である。

大会の最終局面で起きたこと(日本作品二元町アパートの上映時に起きた議論のずれ)をめぐる問題について考えてみたい。

私は昨年の無錫大会後の総括で、三國代表団のフォーラムから得ようとする目的のずれと年齢構成の違いを指摘し、ずれと違いを超え、今大会の議論を活性化するため、以下の課題3つを挙げ、すでに今大会の準備を進めていた私自身にそれを課した。

① 無錫大会の経験から、対話理解のツールである同時通訳、字幕翻訳を充実させる。  
② 老人集団である日本表団に若さを導入する。

③ 議論を深めるため、事前に作品の論点を整理し、場合によっては、論客を集める。結果である。①②に関しては、比較的うまくいったと考える。

字幕作成、翻訳、通訳に関しては、実際に現場に何回か立ち会ったが、スタッフたちがこの事業の意義を十分に理解しての作業が見て取れ、安心したものである。結果、議論も円滑に進行できたのではないかな。

期間中の三國間の対話を促進し、あわせて日本代表団に若さを導入したいとの思いで組織したのが、5つの大学のメディア系学科の日韓中留学生を中心とする、15人の学生通訳スタッフだ。当初、翻訳と通訳だけと考えていたが、4日間の大会運営を代理店に任せず、手作りの大会にしようと決めたところ

で、通訳と大会実施スタッフの兼務という形が出来た。彼らと大会の準備、運営をともしながら、仕事中時折見せる、メディア界の先輩たちの一挙手一投足を見つめる真剣なまなざしを見るのは、実に心地のよいものであった。将来、彼らが三國の架け橋になってくれるよう期待し、彼らの成長を応援したい。

さて、問題は③である。テーマを設定し、それに沿った作品を選ぶ。作品の出品と、制作者の参加を呼びかける。そこまではいい。その作品から、何が論点として出てくるのか、何を論点にするか、それがどう展開するのか、それは誰が語れば良いのか、そこをきちっと詰めていこう、というのが課題③であった。

大会最終局面で露呈した「議論のズレ」は、まさにその③の問題である。最終作品についての日本側の論点は、番組のテーマ、つまり今大会のテーマでもある。「立場の違いを超えて、出会い、そして共生する生き方」であつたはずだ。しかし中国、韓国は、「その立場の違いはどうして出来たのか」、つまり「戦争の加害と被害、そしてその意識」にこだわった。

番組の内容から具体的議論を提起するというルールから言えば、あの局面での、番組そのものに抗議しての退場や、一方的な概念的理論を述べ立てることは違和感がある。私は、歴史認識に関する議論は避けるべきだとも思わないし、むしろしっかりと実のある議論をすべきであると考えて一人

だから、議論されたことに問題ない。問題は、ひとりの個性ある抗議の表現がきっかけになったとはいえ、このテーマは、放っておけば、入り口論で、議論にならない議論に終始してしまい、きちっとした質問にきちっと答える、冷静で実のある議論にならない、ということなをなぜ、予測できなかったかという点だ。

制作者のスケジュールの都合で、最終作品となり、制作者との十分な打ち合わせが出来なかつたという事情もあつた。しかし、我々のこうした不利な事情ですら、韓国側では、日本が意図的に最終作品としたのではないかと疑い、朝5時まで激論したということも聞いた。問題は、彼らのものであり、わりをなぜ予測しなかつたのかということでもある。

配慮、熟慮という言葉がある。今回、その「慮」が足りなかつたのだ、と思う。「慮の意味は、様々な状況、関係を見極め、意を配ることである。つまり、三國間の今の状況、その中で参加する人間は何を思つて参加しているのか、その見極めと対応に誤りがあつたのだ。

現在、三國が歴史認識を巡って、対話のできないほどの関係にあることは当然知悉しているとしても、会場周辺で三國間の友好事業(横浜市の東アジア文化都市事業)に反対する街宣車が走り、東京では、ヘイトスピーチが日常的に行なわれている状況下での大会開催では、国家として屈辱の日(9.18柳条湖事件)を前にして、民間の会議であつても、国家を背負つて立つ意識を持たざるを得

ない立場の参加者や、現実に歴史認識にかかわる番組を現実に制作している参加者に、深く思いをいたす、つまり配慮をいたす必要があったのではなかったか。であれば、作品をどう提示するか、もう少し違った（へやり様）があつたはずだ。2国と違い、フリーな老人知識集団としての日本には、相手が持ち出すであろう論点の考察、配慮こそ、本来必要だったはずだ。それではなぜ、今回何故抜かりが生じたか。

それは我々日本人が、知らず知らずのうちに罹患している「国際感覚欠如症」の所為ではないか。厳しい国際社会を知識としては知つていても、実際にわれわれの体が「慮を働かせられないのは、世界の常識から外れ、国際社会から孤立している」ことに無自覚な現在の安倍政権下の日本人の病いそのものであり、自国の資本で、自国の国民のみ（国内市場のみ）を相手に、NHK対民放の二元体制の70年間、自給自足、自己完結的な日本のテレビ界の住人故の病のせいではなかったか。今大会の議論では、中国、韓国が、お互い共通の市場（お互い相手の国民）に向かつて作品を制作する、いくつかの事例が語られた。この間、一部の共同制作以外に他国の視聴者向けに番組を作る機会のない日本側はこの論議に入り込めないでいたのが印象的だ。

今後についてである。  
大会後、両国からは、今回の件にもかかわらず、今後のこのフォーラムの更なる継続充実への期待が寄せられている。今回の、両国か

ら寄せられた「冷水」を「慈雨」にしなければならぬ。考えなければならぬのは、「国際感覚欠乏症」という、日本のテレビ界の「持病」を自覚し、その治療に専念することだ。今や放送は、電波を超え、国を超え、不断に流通する。放送は文化である。その文化の流通を、政府によるクールジャパンの輸出戦略、国際放送の国策宣伝だけに任せていいのかという問題にも行き着く。我々会員が今後考えるべきことは多い。そう考えたときに、論客になるべき、昨年来統々と入会した、若い会員、在京局の現役制作者たちの参加（参加の働きかけ）がなかったことは、今回はもちろん、今後の三回の議論の充実を図る意味で、極めて残念なことであつた。

大会の全体進行を担当した私自身の反省もある。実務担当者として「大会」という船は建造できた。操船のために必要な糧秣や漕ぎ手も確保できた。しかし、海図を正確に読み取り、船を目的地に運ぶ、その最後の、最も大事なところに、余裕がなかったのが正直なところである。肝心の会議の進行役が、弁当が足りないとか、エクスカージョン用のバスがまた来ないなどと動き回っているようでは、議論の建て直しに割つて入る余裕などなかったのも事実だ。△手作り大会といつても、大会の役割分担を指示、徹底できぬまま、何とかなるだろうと、アマチュアリズムで押し切つた大会運営であつた。実施体制については、今後きちんとした検証をするつもりだ。

横浜市と連携した、市民参加のための様々

な試行、その経緯の中での「放送人の会」存在の周知、関係団体との連携などは、総括すべき事柄は多い。それらは、3月の収支決算も含めた総合的な総括に譲るが、中間報告である。

なんとも皮肉だが、「多くの課題を残し、次の大会に繋いだ」ということで勘弁していただきたい。

大会準備中、多くの方々知り合い、貴重な体験もした。余談になるが、この間、肺炎による入院や、母親の死も経験し、いつのま

にか70歳を超えた。生涯「プロデューサー」として生きたいと願う自分にとつて、今回の仕事は、実にいい修行であつた。しかし今後、同じ修行はできない。同じ内容を繰り返す余裕はなさそうだ。

最後に、実行委員の皆さん、とりわけ、若手会員、牧之瀬さん、田中さん、逸見さん、そして事務局の佐藤さん、須崎さん、お疲れ様でした。そして大山さん、大山勝美基金、感謝します。

左は、日韓中テレビ制作者フォーラム終了後、9月22日付で中国電視芸術家協会の副主席張頭氏から日本放送人の会宛てに送られてきた書簡の和訳。放送人の会の運営に対する慰労と謝辞が述べられている。

本年第14回中日韓テレビ制作者フォーラムが日本の横浜で開催された際、貴会が多様な準備作業をして頂いたことに対して、中国代表团並びに私自身は深く感謝の意を申し上げます。

10数年来、中日韓テレビ制作者フォーラムは3ヶ国のテレビ制作者が互いに交流し、学び合うために、素晴らしいプラットフォームを作りました。特に、異なる観点、立場からフォーラムの交流と討論を深めることが出来ました。フォーラムは3ヶ国のテレビ制作者同士の理解と友情だけではなく、さらにテレビ制作者が自分の制作したテレビ番組を以つて3ヶ国の国民同士の理解を深めることが出来、テレビメディアが中日韓3ヶ国の友好を促進させる役割を果たすことも出来ました。

私は心から中日韓テレビ制作者フォーラムがますます素晴らしい会になるようお祈り致します。

改めて貴会並びに今回のフォーラムのために頑張つて下さった関係者の皆様に感謝を申し上げます。

中国テレビ芸術家協会 駐会副主席 張 頭

# いろはに時代劇

その拾き

菅野高至

それは、97年の晩秋、無名塾の隆巴道  
悼公演「いのちぼうにふろう物語」（原作：  
山本周五郎「深川安楽亭」、脚本：隆巴）  
を観に行ったときのことである。終演後の  
楽屋で、仲代達矢さんはいきなり、「菅野  
ちゃん、清左衛門の役作り、あれは間違っ  
ていた、もう一回やりたい、続編、やろう！」  
と熱く語る。

「妻を亡くした清左衛門、僕が演じた彼  
の心情は嘘っぱち、絵空事だった。だから、  
やり直したいんだ」

この一言が、「清左衛門の続編」を考え  
るきっかけとなった。

96年6月、最愛のパートナー宮崎恭子  
（隆巴）さんを失い、葬儀・告別式を終え  
ると、仲代さんは引きこもり状態に陥って  
しまい、飲酒、不眠、抑うつ、食欲不振、  
栄養失調となる。だから、今ならリアルに  
清左衛門が演じられる、妻を失った深い喪  
失感を抱えた本当の清左衛門が演じられ  
る。ぜひとも、やり直したいんだと訴える。  
う〜ん、困った。リアルな清左衛門！  
そんなのダメです！ 自閉した清左なん  
ぞ、誰も観たいとは思わないです!!と、言  
下に言いたいところだが、そこはそれ、敬  
愛する仲代さんのこと、「いや、まあ、原  
作もありませんし……まあ、まあ」と言葉  
を濁して、そそくさと楽屋を後にする。

以来、仲代さんや、事務所のOさんに会  
う度に「清左衛門、どうしたかな？ いつ  
撮れるの？」と催促されることになる。い  
つかは果たさなければならぬ重い宿題  
となる。

だが、その前に、99年大河ドラマのプロ  
デューサーを命じられて、宿題は暫しお預  
けとなる。

「元祿縁乱（原作：舟橋聖一、脚本：  
中島文博）。お話は「忠臣蔵」である。こ  
れから2年間で「忠臣蔵」と添い寝しなき  
やいけないのかと考えると、仲代さんとの  
宿題よりも、何とも気が重くなる。

忠義の仇討ちとはいえ、所詮、忠臣蔵は  
人殺しの話。50人近い集団で、たった一人  
の老人に死を迫る……。

行き着くところ、テロの話じゃないか。  
因みに、辞書をひもとくと、「忠義」とは「私  
欲をさしはさまないで、まゝころを尽くし  
て主君や国家に仕えること」とある。

NHKの資料室を漁り、神田の古本屋を  
巡って集めた資料を眺むれば、これは紛う  
事なき「忠君愛国」であるのだ。こんな危  
ない物語をなぜ、この私が！ と愕然。

幼少のみぎり、インド独立運動のネルー  
が書いた「父が子に語る世界の歴史」を訳  
も分からず読まされたおかげで、非暴力・  
民主主義になったのに、宮仕えとはいえ、  
なぜ私が忠臣蔵なのだ。嗚呼、嗚呼……と  
なつた。

この重く暗い気分を飲み込むのに、悶々  
と半年がかかる……。

もつとも、悶々としたものの、走ってし  
まえば大河は面白い。役者との出会いが豊  
かなのが美味しいのだ。五代目勘九郎（十  
八代勘三郎）さん、やんちゃな天才を通し  
て歌舞伎になじめたのは、これは本当に幸  
運だった。

あの頃、彼は勘三郎襲名を少し待たされ  
ていて、それが故に無茶苦茶に挑戦してい  
た時期である。楽しく魅力一杯の挑戦は：  
…もう見られない。

そして一年半後。大河が終わる頃、年季  
奉公が明けるがごとく、企画を出すため、  
いそいそと脚本家巡りを始める。巡る中に、  
茅ヶ崎に住む山内久さんがいた。99年の冬  
のことである。

ドラマ部内でも、長老の久さんに単発ド  
ラマを、との話があり、その命を受けて、  
久さんと企画立ち上げの話始める。まず  
は、よしなしごとの雑談から、何かが生ま  
れるはずと逢瀬を重ねる。時に立原りゆう  
さんにも話に加わって貰う。だが、なかなか  
思うように、互いに書きたい・見たいと  
いう企画が生まれて来ない。

久さんは74歳、私は53歳、果たして、  
年齢のギャップなのか？

やつと、演出が決まる。大河で四番手の  
演出をつとめた本木一博、歳は30代の初め。  
年齢の幅はいつそう広がって、いわば祖父  
と父と孫の三世代で作るドラマとなる。

演出が決まり、ようやく仲代さんとの宿  
題を果たそうと、私の中で踏み切りがつい  
た。初老の男の話を演出するには、確かに

彼は若い、この道50年の大先輩のホンと  
格闘するのも、それはそれで贅沢な投資だ  
とも考えた。

少なくとも、大正14年生まれの久さんと  
12年生まれのりゆうさん、素敵な夫婦のた  
たずまいに触れるだけでも、演出家として  
糧になるはずだ。だが、ゆつたりとたゆた  
うような打合せに、若者はただただ痺れを  
切らし、呆果てていた……。

かくして、「清左衛門の続編」が出来上  
がる。愛妻を亡くした日本刀の研ぎ師（仲  
代達矢）は、何もかもやる気を失い、家に  
籠もつたまま、2か月あまりの時が経つ。  
ある日、空腹に耐えかねて町に出るが、と  
ある店先で気を失って倒れてしまう。その  
場に出くわした舞台美術家（鈴木砂羽）に  
助けられる。倒れた原因が栄養失調と分か  
り、彼女は料理人志望の元恋人（蟹江一平）  
を家と呼ぶ。「袖振り合うも多生の縁」、ふ  
と出会った三人が刺激し合って、それぞれ  
の人生の再出発を迎える。

土曜特集ドラマ「袖振り合うも」（70分、  
00年10月28日19時30分）は、のちに、  
平成12年度第55回芸術祭優秀賞を受賞す  
る。

私と仲代さんの「清左衛門残日録」は、  
これでようやく完結した。（つづく）



## 「ラジオプロジェクト」始動

### 発足パーティー開催

放送人の会所属のラジオ関係者によって構成される「ラジオプロジェクト」(総勢26人所属)は9月19日(金)に紀尾井町文春ビル西館「ラウンジ春秋館」で遠く長崎をはじめ富山、愛知、静岡、仙台、山梨等全国各地から21人が集まり発足記念パーティーを開きました。

会の冒頭でラジオプロジェクト名誉顧問である松尾羊一さんは「ラジオを取り巻く環境は非常に厳しいものがある。ラジオの現場感覚を持つ人間同士が集まり、自由な発想でラジオを再生していこうという会です。皆様の積極的な活動によって会が発展していくことを期待します」とプロジェクト発足の意義を語りました。

続いて今野勉会長は挨拶で「放送人の会は1997年にTV界の不祥事をきっかけ



ラジオプロジェクト・発足パーティー

に生まれTV中心に活動してきたが、これからラジオの活動が活発化することを期待します。自主的に集まった集団なので自由に活動していただきたい。」と語りました。

この後、参加者が順次自己紹介を兼ねてラジオ現場の苦しい現状や新しい動きの報告、このプロジェクトへの抱負等を語りました。

参加者の中には(株)Jプラネットの浮田周男さんによる前日発表された民放連盟賞のラジオ教養部門優秀賞を受賞した番組の報告や、同じくラジオ報道番組部門とエンターテイメント部門で優秀賞を受賞した山梨放送の児玉久男さんによる今年の大震災時に於いてラジオが大活躍したとの報告、NHKの斉明寺以玖子さんのラジオドラマ制作一筋50年の話等の興味深い話が続き、時間の経過を忘れるほどの盛会の内に閉会となりました。

今後「ラジオプロジェクト」はより多くのラジオ関係者に参加を呼び掛けていく方針です。又、会報「ラジオのページ」には新しいメンバーの方々に執筆していただくことを考えております。(田中秋夫)

## 大雨特別警報避難勧告に学ぶ

FM北海道常務取締役 中田美知子

9月11日深夜、我が家で飼っている小型犬のパピヨンがいきなり私のベッドに飛び乗ってきた。耳をびんとたてて窓から外を見ている。暗い中でも強く雨が降って

いることはわかる。私が寝返りをうつとおびえたように飛び降りて、隣の部屋に走りこんだ後、また戻ってきた。しばらくすると空で稲光がし、10秒後後に雷が鳴った。それで合点がいった。大自然の音を犬は早いうちに聞き分け、不安を感じ取ったのだろう。

それから1時間後、3時11分に携帯電話が緊急音を発した。初めて聞いた音である。暗い部屋で画面のテキストを読む。「南区・避難勧告(土砂災害) こちらは、札幌市災害対策本部です。南区芸術の森、石山、藤野、藤舞(みすまい)連合町内会に避難勧告を発令しました。(後略)」とあった。その後東区から最終的には私のいる中央区にも避難勧告が出された。最近わかったことだが、ここはマンション街でありながら50数年ほど前に川が氾濫し浸水したエリアで、札幌市の「土砂崩れ危険箇所」にも入っていた。このところ100年に一度という災害が起こり得るのだという現実には直面してきたので、息子を叩き起し、犬2匹を抱き、荷物をまとめ近くのマンション5階に住む娘の家に避難した。その頃には落雷は光った3秒後と近づいてきた。

TVはほとんどの局がショッピング番組を放送し、NHKは情報のみを送出、S TVが午前4時40分頃に中継を交えながらの特番に切り替え格闘していた。間違はなく、この日市民にいち早く避難情報を伝えたのは携帯電話のエリアメールだった。

一晩中鳴った警告音は、通勤時間帯になっても、バス内で乗客の携帯電話全部が、時間差でけたたましく鳴り響いた。このときラジオは、聞き漏らしがあったかもしれないが、早くても5時ころからの速報体制だった。

この日を振り返ると、0時55分に札幌市に土砂災害警戒情報が出され、3時09分に札幌市が災害対策本部を設置、5時35分に石狩管内全域に大雨特別警報が発令された。避難勧告は90万5千人に出されたが実際に避難した道民は479人だった。結果として特に被害がなかった地域の人々にとっては壮大な防災訓練をした感があったが、災害の少ない札幌市民にとっては防災意識を確認する機会となった。しかし隣の江別市では、浄水場の水源が大雨によって濁り、大規模な断水が起こり長期化した。降雪量が多く断水の少ない北海道では稀なできごとだった。白石区では避難所を案内するはずの区役所の電話が落雷のため3時間半にわたって不通、区民は混乱した。市内厚別川が増水し、道々の一部がえぐられ長さ30メートルにわたって陥没した。南区の常盤の山あいの集落で数十戸がある住宅や別荘の一部が浸水し孤立状態になった。雨の中交通事故でなくなった方はいたが、直接の大雨による死者はいなかった。

この猛烈な雨を降らせたのは「線状降水帯(せんじょうこうすいたい)」と呼ばれる発達した長い雨雲で、近年道内で局地的

き、3週間前広島に被害をもたらしたと同じ「バックビルディング形成」が起こった。大気の状態が不安定なときに風上側で次々と新しい積乱雲が発生する現象である。あとで考えればぞっとする。

ラジオは災害地にいち早く電波で情報を届けられるメディアである。最低で電気などインフラが使えないときに、適切な情報を送るのがラジオの役割である。道民の命を救うためには普段から聴取者に周波数を合わせてもらう必要がある。その信頼関係を保つために日々楽しい放送をし、必要な時に速報体制を敷く、そう教えられて来た。

いまラジオの現場は様変わりしている。むかし気象情報はウエザーニュースや、気象協会から、交通情報は道路交通情報、JRや航空機はFAXで運行情報が入る。今ではそのほとんどがネットでの情報送出である。これを解説するには読み取る力を継続訓練する必要がある。道や市町村の情報は「公共情報コモンズ」で送られる。これは最近「Lアラート」と名前を変えた。地方自治体が避難勧告、避難指示といった安心安全に関わる情報をインターネットでTV・ラジオなどのメディアに送る仕組みである。

ここ数年ハードの環境は整って来たが、肝心の介する人間の能力が伴っていない。市町村によつては、防災担当が兼務だったり、人数が1人しかいないなど体制が十分とは言えないという分析もある。いざとい

う時の情報処理は進まず、避難勧告、避難指示が遅れ被害が出る。

メディアも似たような現象だ。ニュースデスクは山のような情報からの確に必要ない情報を選別する能力が必要とされる。継続して報道に携わっていないと、どんなベテランアナウンサーでも、どのPC画面にどのように情報が出て来るのか瞬時にはわからない。

情報の取得方法の整理と人材育成をしていかないとラジオの未来はない。ファーストインフォーマーとしてのラジオには今後多くの課題が残されている。

### 「ラジオマンを導く灯火」の必要性

静岡放送 ラジオ局編成制作部

佐野有利

この度「ラジオプロジェクト」が立ち上がるということでお声がけを頂き、入会させていただきました。40代の若輩者ではございますが、みなさま宜しくお願い致します。

私は入社以来制作、報道、営業でラジオと関わってきました。今ラジオの現場を支えてきた特に団塊の世代の「制作マン」が次々に離れています。ラジオはその誕生以来、時代による表現方法の変遷はあっても制作の基本は何も変わっていないと思えますが、必ずしも現場ではそれが受け継がれてはいません。

また私の会社はラテ兼営局ということ

もあるのですが、そもそもラジオの現場を志望して配属される人間は少なくなっています。ラジオ番組をどのように聴く人が思いつくのか、どのように聞かせるのか、しっかり伝わっているのか、喜んでくれるか。想像ができていないか。番組は内輪受けにならないか。目の前の「ヘビリスナー」の反応だけが世の中のすべてだと思っていないか。さらに番組で言いたい事を伝える能力はどうでしょう。これらすべてにマニュアルはありません。

私は小学生時代からラジオを聴いてラジオ局に入りました。異動を重ねこの春およそ10年ぶりに制作の現場へ復帰しましたが、原点に立ち返るときに聴く物がありません。それは学生時代から録りだめてきた、かつてのラジオ番組を収録した1000本以上のカセットテープです。聴けば自分の原点を顧みる反省するきっかけになります。もちろん今の他局の番組からでもラジオから得るものが多くあります。

今、ラジオとどう対峙するか。年配の方を中心に未だに「門前の小僧」を求めている方がいらつしやいますが、すでに「小僧」はいません。もう精神論で通用しなくなっています。私はかつての成功体験を仲間もない若い世代へ受け継ぐ必要を感じます。そのためには若い世代を育てて行くことが必要です。

ただ1つ間違いない事は、ラジオも「まだまだ」多数の人に聴かれていることです。必要とされているということですが。

つまり多くの人を動かす事ができる、世の中を動かす事もできる、そして多くの人を感動させる事ができることです。「広がり」を持った番組を作り続ける。入社以来私が師事してきた先輩からは「小さいスタジオでもその井戸が深いこと知る事が大事」と私に言い続けてもらっていました。

私はここ10年ほどの間、問題の解決方法を社外に求めました。様々な方々に会いましたし指導していただき励まされました。制作した番組も聴いていただきました。お叱りも貰いいただきました。さらにSNSにそうした全国の現場に携わる人々が、会社や立場を超えて意見や情報を気軽に交わす場ができました。制作した番組の意見交換会も行います。そこはただの愚痴の吐き捨て場ではなく、仕事の手法、番組との向き合い方の違いを発見し知るだけでも意義のある場所であることは間違いありません。そんな繋がりで知った1人は先の放送人グランプリでも表彰されました。多くの現場が解決方法を求めています。今ラジオの現場を支えているのは「ラジオ愛」だけかもしれません。「ラジオプロジェクト」のように、熱のある人間同士の横の繋がりを深める事が、狭いスタジオの中の「井戸の深さ」や「世界の広さ」を知るきっかけになると考えています。皆様、今後ともご指導ご鞭撻を宜しくお願いします。

# 第46回放送人句会

◇平成26年9月10日(水) ◇於：赤坂・表屋

◇選者：星野高士

◇出席：伊藤視郎(視)、荻野慶人(慶)、鶴橋康夫(康)、豊田まつり(ま)、新村もとを(も)、西川阿舟(阿)、堀川とんこう(と)、森治美(治) ◇不在投句：山県ほん太(ぼ)、

## 【星野高士特選】

大川に大魚のはねる良夜かな 視郎  
種吐くも美味さのうちの葡萄かな 慶人  
試写会の空気をまとふ良夜かな 治美  
駆け落ちのやましさを消せぬ良夜かな 治  
酒樽を積みて良夜の川下る もとを  
バスが去り静まり返る葡萄棚 治美  
露けさは試写会前のロビーかな まつり  
野分立つ原野に渡る汽笛かな 治美

【星野高士選】  
チャリンコのゆらり影踏み良夜かな 康  
不服づらひと粒つまむ黒ぶどう と  
葡萄棚笛吹川へ抜ける風 もとを  
新涼の試写に大物記者の顔 ほん太  
富士山の全容見ゆる良夜かな 視郎  
ひと房のぶどう抱へし少女かな 治美  
月今宵甘えん坊のイヌ抱いて ほん太  
パソコンや種なし葡萄たべやすし ま

種のなき巨峰何やらもの足りぬ 阿舟  
朝摘みのピオーネ籠に余るほど ほん太  
世界一折り傳く野分立つ 慶人

スタッフの献酬に酔ふ良夜かな 阿舟  
落武者に里の灯遠き野分かな ほん太  
プレヴェューを終へ坂下る良夜かな も  
夕陽燃ゆ村の陰部に野分かな 康夫  
愛一つさつと消えゆく野分かな 康夫  
試写室の話は秋の視聴率 視郎  
野分道僧の急ぐは墨絵めく ほん太  
停電の真つ暗闇に野分来る 視郎  
見られたくない顔伏せる良夜かな 慶  
野分してひとりの星のオムライス ま  
大小屋を裏手に移す野分かな とんこう  
耳門より僧の駆け込む野分かな も  
キプロスの島の段丘葡萄熟る ほん太  
道つくる野分の後に我ひとり 治美

## 【会員互選】

朝帰り蜘蛛の巣はりつく野分かな 康  
良夜たれ疑心暗鬼の雲晴れて 慶人  
野分立ち恋しき人はなほ恋し まつり  
房の数数えていくつブドウ棚 視郎  
道々の常より広く見ゆ良夜 とんこう  
激しかれ野分入江を持ち上げて と  
裏返り一衣の波の良夜かな 康夫  
神在せる島の閑かさ良夜なる もとを  
草も木も湧かせ掻き立て野分立つ も

【選者吟】  
襟元の埃り払ひて良夜かな 星野 高士  
試写会のあとの深酒十三夜 治美  
試写会で逢へる人ゐる夜長かな

街中に六地藏ある良夜かな  
庭先に川音のある良夜かな  
雨の日の種なし葡萄きりもなし  
待ち合はず駅の裏側夕野分

## 次回放送人句会

○11月12日(水) 18時頃から  
○赤坂・表屋  
○兼題：冬紅葉、木枯し、西の市、代役(テレビ用語・冬の季語を入れて)

## 第45回放送人句会

◇平成26年7月9日(水) ◇於：赤坂・表屋

◇出席：伊藤視郎、荻野慶人、豊田まつり、新村もとを、藤森いずみ、堀川とんこう、森治美、西川阿舟 ◇不在投句：山県ほん太

◇兼題：団扇、百合、氷水、電波  
抱擁の手にそれぞれの花うちは とんこう  
百合燦々音立てて降る山の雨 ほん太  
抜け道を団扇で示す漁師町 とんこ  
う  
住み馴れし町去り難し掻き氷 ほん太  
異常気象左団扇がいつか右 慶人  
真夏日に電波で届く辞表かな いずみ  
阿波の夜へ団扇かざしつ繰出せる ほん太  
青嵐電波を連れて駆け抜ける 治美

虚と実を電波が運ぶ熱帯夜 とんこう  
日暮るれば鬼百合夜を艶めかせ もとを  
誰を待つもの道にて白き百合 いずみ  
かき氷調布市を電打ち叩き まつり  
喧嘩して母と無言の氷水 いずみ  
電波からふつと消えられ風死せり まつり

風鈴は黄泉からの電波探知機 もとを  
電波塔ネオン涼しく夕暮れし ほん太  
三本に一本おまけ洗団扇 もとを  
亡き彼の真似して崩す氷水 いずみ  
石垣の隙間に伸びて百合咲けり 阿舟  
かき氷急ぎ食べたる頭痛かな 阿舟

父親の前後から団扇風 まえうしろ 視郎  
宇宙より電波が届く夏館 視郎  
団扇風やはり竹骨こそよけれ 阿舟  
氷水無人の路次に旗ゆれる とんこう  
A4とB5を分けて団扇挿し まつり  
氷水下痢させるなよ孫二歳 阿舟  
その話前にも聞いた氷水 もとを  
画像また砂嵐来て熱帯夜 ほん太  
メガホンに団扇風船ペットボトル 慶人  
網戸ごし夜更けて百合の香は妖し とんこう  
振り向けば白百合君が香にまがふ とんこう  
百合たむけ想ひたゆたふ仏間かな 治美  
夏芝居電波に乗せて国巡る 治美  
絢爛を形にすれば百合の花 もとを

### 新入会員紹介(申し込み順)

**玄武岩**(ヒョンムアン) 69年5月生。北海道大学准教授。著書『韓国デジタル・デモクラシー』『統一コリア・東アジアの新秩序を展望する』『大日本・満州帝国の遺産』『コリアン・ネットワーク』『メディア・移動空間の歴史と空間』

**黒崎博**(くろさきひろし) 69年5月生。92年NHK入社、教育番組、ドキュメンタリーを学んだ後ドラマ制作。ドラマ「マチベン」「帽子」「火の魚」「セカンドバージン」「メイドインジャパン」、映画「冬の日」「セカンドバージン」

**石橋映里**(いしばしえり) 構成作家として「ザ・ワイド」「文化遺産の旅」など担当。著作・マンガ脚本「経済ニュースの裏を読む」。現在日本脚本アカイプス推進コンソーシアム事務局代表として放送番組の脚本、台本収集を行っている。

**江川雄一**(えがわゆういち) 52年3月生。元文化放送。70年代、「セイヤング」等深夜放送担当。80年代、報道、「ワールドホストライン」担当。「全日本歌謡選抜」。90年代以降、T・F・M、INTERFM、NACK5、エフエムヨコハマ、QR、LF、TBS、NHKで番組制作。現在㈱グリーン・ドルフィン代表取締役

**高田宏**(たかだひろし) 45年1月生。68年ニッポン放送入社。制作部、編成部、営業部、名古屋支局長を経て、84年㈱東京エンターテインメントを設立。現在同社社長

**秋田和典**(あきたかずのり) 50年11月生。73年東海ラジオ入社。「さんさんモーニング」「ぶつつけワイド」など人気ワイド番組を担当。民放連ラジオ教養部門賞「太夫と才蔵の村」、芸術祭ドキュメンタリー部門優秀賞「詩人・城山三郎が遺したことは」、放送文化基金ラジオ部門賞「よみがえる話 芸術談話教」などを制作。

**浮田周男**(うきたかねお) 39年10月生。ラジオ関東制作部、エレックレコード宣伝部、フリーのディレクター・プロデューサーを経て現在㈱ジー・プラネット。

**林安一**(はやしやすじ) 47年4月生。元文化放送。現在イー・イー・ユー㈱代表取締役。

**相本芳彦**(あいもとよしひこ) 28年5月生。元北日本放送。NTV系アナウンス大賞、ギャラクシー賞、民放連賞、芸術祭賞、放送文化基金賞など受賞。現在フリーアナ、NPO法人「Fサイト」副理事長。

**塚本茂**(つかもとしげる) 48年6月生。文化放送。「福井謙一グッモニ」「ドコモ団塊倶楽部」など担当中。

**藤森泉**(たかもりいずみ) 50年8月生。元静岡放送。「モーニングダイアル」「ぶつつけスタジオカントリー」「土曜はぎぎげん」などを担当した後、「お茶はカルチャあゝ八十八夜が初夏の香りを伝えます」「登呂発掘」「カルチャースクランブル」東西対決静岡場所「花咲くシクスティーズ」J・P・OPの夜明け「下田奉行が開いた草競馬」ペリー下田150年近代音楽事始め」など

で民放連賞、ギャラクシー賞などを受賞。

**鈴木俊樹**(すずきとしき) 63年3月生。86年東北放送入社。ラジオオスペシャルドラマ「バスはまたですか?」で民放連優秀賞。同「ブラットホーム」で芸術祭優秀賞。現在ラジオ局制作部長。

**笹山正勝**(ささやままさかつ) 元FM東京、東京メトロポリタンテレビ。報道制作局長、MX音楽出版専務、営業局長を経てMX音楽出版社長。現在同社顧問。

**重盛政史**(しげもりまさし) 66年6月生。89年福井放送にアナウンサーとして入社。「げんき一番」のパーソナリティーとして民放連賞受賞。その後JRNアナウンス大賞、NNSアナウンス大賞を受賞。「時を越えて ああ青春の日 だるま屋少女歌劇団」で民放連賞、ギャラクシー賞を受賞。現在福井放送ラジオ営業部長。

**倉澤治雄**(くらさわはるお) 52年6月生。元日本テレビ。政治部、経済部、外政部を経て現在フリー。著書「原子の船むつ 虚構の航跡」「原爆 爆発」

**つボイノリオ** 49年4月生。ラジオパパーソナリティーとして活躍。東海ラジオ「ミッドナイト東海」岐阜放送「ヤングスタジオ1430」FM愛知「バックステージパス」ラジオ日本「つっぱり30分」ニッポン放送「オールナイトニッポン」等に出演。現在CBCラジオ「聞けば聞くほど」「KB S京都「つボイノリオ」に出演。作詞作曲家として「金太の大冒険(かつて放送禁止指定曲) ほか多数。

### 新刊紹介

#### TVディレクターの演出術

高橋弘樹著(ちくま新書)



テレビ実践書のハウツー本めいた題名だが、中身はまるで違う。経験の浅い若いビジネスマン向けにも役立つ企画や仕事のヒントがちりばめられている本。筆者はテレビ東京に属してタレントでないド素人のマニアたちが競い合う「TVチャンピオン」をはじめ最近では「くもしい」(語り 伊武雅刀)の案内で空撮とポイント取材で構成する「空から日本を見よう」や、成田空港のロビーで外国人をつかまえ「YOUは何しに日本へ?」と訪日の理由を問いただし、追跡取材を重ねているうちに見えてくる「もう一つの日本」が浮き彫りにされてくる番組「YOUは…」などを作ってきた現役のテレビ人。視聴率ランキングでは万年最下位に甘んじているかのようなテレビ局の企画や番組が業界内では注目され、各局にそっくり真似た類似番組も多い。大物タレントは使えない、ひな壇形式でタレントを動員できない低予算下では、モノ、カネに頼る番組は組めない。どうするか。「人の行く道に裏あり花の山」

をモットーに知恵をしぼる。たとえ低視聴率でも粒の揃った高感度な視聴層は見込める。不特定多数の王道番組ではないが、裏道のけもの道は王道にはない「外道」の面白さがあるに違いない。思わぬ獲物の在りかが発見できるかもしれない。その手の内を具体的な制作事例を駆使して現場の実態をシニカルに描いた書になっている。巧みな筆致で今のテレビが置かれている環境と組織を解明している。(M)

### ヒロシマはどう記録されたか

小河原正己著 (朝日文庫・上下2巻)



著者の小河原氏は会員。NHK広島で原爆、核報道に関わり、東京でN特「核戦争後の地球」の制作統括を担当した。

内容は中国新聞の報道の記録やNHK広島で担当した番組が中心になっており、メディアがヒロシマをどう伝えたかの視点で俯瞰的にまとめられている。有名な松重美入さんの御幸橋の写真に関するエピソードや、被爆地図復元への市民の協力など、その視点での、メディアに携わったものだからわかる感動が描かれる。

ヒロシマを次世代に伝えることを考えている人に示唆することの多い本だ。(I)

### 編集後記

▼編集作業中に大山勝美さんの訃報が届きました。喪主の渡辺美佐子さんは公演があつて、偶々会、お別れ会は12月まで待つてください、とのこと。会報での大山さん追悼特集は次号(1月下旬発行予定)に掲載します。追悼文のご執筆はあらためておねがいします。下欄の名簿から彼の名前を削除した編集者の気持ちをお察ください。▼ラジオプロジェクトが発足し、ラジオのページは田中秋夫さんに仕切つていただきました。日韓中フオーラムに関しては沢山の方に原稿をいただきました。ありがとうございます。▼横浜・モントレーホテルはセキュリティが厳重で本人のカードキーがなければ個室のある階にエレベーターがとまらない。皆さん苦労して伊藤、バーに多数おいでいただき、「コマ大戦」の裏話、自民党政府のメディア・コントロールなど、談論に花が咲きました。バー会計は若干の赤字でしたが、曾根さんに助けていただきました。(視察)

▼右翼の街宣車の「歓迎(?)」というハプニングで幕を開けた『初めてのフオーラム』。同じアジア民族なのに、大陸側に暮らす人々と海に囲まれた島国に暮らす私たちとはこんなに違うものなのかと肌で感じた4日間でした。▼これまでこのフオーラム開催に、尽力された諸先輩方の「苦労を改めて痛感いたしました。(金子)

### 会員名簿

2014.10.15 現在

- 【あ】 相本芳彦 青木裕子 秋田完 秋田和典 秋山豊寛 雨宮望 新井和子 【い】 池田正之 石井彰 石井ふく子 石高健次 石橋映里 石橋健司 石橋冠 磯智明 磯野恭子 磯村健二 市岡康子 市川哲夫 市村元 一色伸夫 伊藤雅浩 井上佳子 井上良介 今井義典 岩澤敏 岩瀬弥永子 【う】 上田洋一 上村忠 浮田周男 碓井広義 臼杵敬子 歌田勝彦 内山洋道 宇野昭【え】 江川雄一 江口展之 榎本恒幸 遠藤利男 遠藤ふき子 遠藤雅充 【お】 大池雅光 大蔵雄之助 太多亮 太田敬雄 太田昌宏 大西康司 大西文一郎 大野秀樹 大原れいこ 大類啓 岡弘道 岡田晋吉 緒方陽一 岡野真紀子 岡村黎明 小川治 小河原正己 沖野瞭 荻野慶人 尾田皇子 小田久榮門 織田晃之祐 【か】 加賀美幸子 各務孝 片岡敬司 勝部領樹 葛城哲郎 加藤滋紀 加藤節男 加藤拓 加藤迪 加藤義人 金澤宏次 金沢敏子 金子登起世 金平茂紀 加納孝夫 川平朝清 鎌内啓子 上安平冽子 亀谷弘美 鴨下信一 川喜田尚 川口健一 川口幹夫 河村正一 【き】 岸田功 北川泰三 北川信 北川祐美香 北出晃 北林由孝 北村美憲 北村充史 木村成忠 【く】 楠美昌 工藤英博 久保志穂 隈部紀生 倉内均 倉澤治雄 訓嗣圭 黒崎博 黒沢淳 【こ】 小池勝次郎 河野尚行 小玉滋彦 児玉久男 後藤和晃 小山紳人 近藤一男 近藤邦勝 近藤晋 今野勉 【さ】 斎藤伸久 斎藤秀夫 斎明寺以玖子 酒井美樹男 寒河江正 坂元良江 桜井均 佐々木彰 佐々木欽三 笹山正勝 佐藤敦 佐藤年 佐野有利 澤田隆治 沢田隆三 【し】 重延浩 重村一 重盛政史 静永純一 志津木敬 四宮康雅 柴田昌平 嶋田親一 清水満 志村一隆 下崎寛 下重暁子 白井博 【す】 首野高至 首野嘉則 杉澤陽太郎 杉田成道 鈴木昭典 鈴木俊樹 鈴木典之 鈴木道明 鈴木嘉一 須磨章 【せ】 関佳史 せんぼんよしこ 【そ】 曾根英二 【た】 高島秀之 高田宏 鷹森泉 竹中一夫 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中則広 田原茂行 玉城朋彦 【ち】 崔銀姫 【つ】 塚本茂 辻本昌平 土屋敏男 つボイノリオ 露木茂 鶴橋康夫 【て】 寺島高幸 【と】 東城祐司 堂本暁子 戸田桂太 外崎宏司 豊田由紀子 豊原隆太郎 【な】 中尾幸男 中込卓也 中崎清栄 中島僚 中田美知子 永田浩三 長沼士朗 永野敏一 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村耕治 中村敏夫 中村美美子 中山和記 並木章 【に】 新村もとを 西憲彦 西村与志木 西ヶ谷秀夫 西川章 仁藤雅夫 二宮文彦 丹羽美之 【の】 信井文夫 【は】 橋本深 林健嗣 林安二 原由美子 原田令嗣 【ひ】 玄武岩【ふ】 深町幸男 藤井チズ子 藤久ミネ 藤村忠寿 【へ】 逸見京子 【ほ】 星田良子 星野輝一 堀川とんこう 【ま】 前川英樹 牧之瀬恵子 松尾羊一 松平定知 松前洋一 松本修 黛りんたろう 【み】 三上義智 水上毅 水野憲一 南譲 三原治 三村景一 三村千鶴 宮崎洋 宮川謙一 三宅恭次 明神正 【む】 村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】 本木敦子 諸橋毅一 門奈昌彦 【や】 八木康夫 矢島良彰 藪内広之 山鹿達也 山県昭彦 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世 【よ】 横山英治 吉澤保 吉田賢策 吉永春子 吉村豪介 吉村直樹 【わ】 若松央樹 和崎信哉 渡辺浩平 渡辺紘史
- 【賛助会員】 日本民間放送連盟 TBSメディア総合研究所 融合研究所 日本ケーブルテレビ連盟